
。隣人クライシス。

だいたい。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

。隣人クライシス。

【Nコード】

N7771R

【作者名】

だいたい。

【あらすじ】

隣の家に住むのはこのへんじゃ有名な不良且つイケメンの幼馴染み。隣の学校に通うのは幼馴染みの友人且つ金持ち且つまたもイケメン。隣の席に座るのは転校生且つヤンデレ且つなんと美少女。こんな【隣人】たちと繰り広げるそんな感じの物語。もしかしたらもっと【隣人】が増えるかもしれません！5/11：あらすじ、タイトルを変更致しました。

隣の『君』の気になる人。

じゅーっと紙パックから野菜ジュースを吸い上げる。今は昼。場所は屋上。背後にいる男に寄りかかる、人によって抱きしめられてるようにも見えるかもしれないが自分は寄りかかってるつもりだ。うん。ちらりと背後の男を見る。一見ばーっとしてるように見えなくてもないが付き合いが長い自分なら分かる。見とれているのだ。視線を戻して向かい側にいるとある女子生徒を眺める。目が合ったから笑ったら笑い返してくれた、その直後後ろの男の体が強張ったのがわかった。ふう、溜息をついた後もう一度野菜ジュースを吸い上げる。ずこーと音がした。おおっと空だったのか。仕方がないからまたちらりと見上げる。相変わらずばーっとしている。自分はまた溜息をついた。

どうせならはつきりすればいいと思う。先程からばーっとしているもとい見とれてる男をみる。昨日もそう、一昨日もそう、明日もそうだ。もうはつきりすればいいんだ。ふうっと溜息をつく。びくりと隣にいた女子が肩を揺らす。ああ、そういえば教室で雑談中だったのを忘れてた。

「ご、ごめん。何か嫌なこと話してたかな・・・？」

「気にすることないわよ、どうせ違うこと考えてたんでしょ？」

その通りだ。黙って頷くと、ほっとしたような顔をする。可愛い子だ。いつもじゃないけど基本おどしてる子は高橋たかはし綾あやすこい可

愛い。うん。もう1人は柳やなぎ 三樹みきこっちは可愛いというより美しい。気の強い子だし、多分自分のこと嫌ってる。仲良くしてくれてるけど。

「うじうじしてる男って見てて苛つくよね。」

「はあ？」

「あ、えっと・・・そう、かなあ？」

「うん、自分は嫌い。それじゃ。」

席を立つと教室の前でたむろっていた男。幼馴染みである、楠木くすのき啓介けいすけを掴むと引きづり歩いた。近くにあった無人の教室に入る。手を離すとゆっくりと姿勢を正した。

「あー・・・、何で怒ってるの？」

「うじうじしてないでさっさと告白したら？そして心が碎ければいいのに。」

「んー？・・・ああ、やっぱりお前にはバレてると思った。」

「穴が空きそうなくらい見てたもんねえ？けいちゃん。」

あー・・・、と何か言おうとして口を閉じる。そして苦笑を浮かべた。うじうじしてる男は嫌いだ。こいつみたいに無駄に顔が整ってる男なら特にだ。幼馴染みのけいちゃんは今身内びいきをしても頭が悪い以外は基本、完璧だ。慣れるまではあまり表情も変えないし、おしゃべりなわけでもないが何故か人が群がるわ群がるわ。さらにこの辺じゃ有名な不良と言われているから、取り巻きだとか舎弟(?)みたいなやつらもうじやうじやしてる。そしてこの男のカノジョという人物は決まって同じ条件がある。

「今回もいつもと同じ理由？」

「んー、そう。・・・あいつ、ホント可愛い。守ってやりてえ。」

庇護欲をそるくらいに可愛い子、である。昔から見た目と反して可愛いものとか甘いものが好きだった。そして気付いたら可愛い子まで好きになっていた、という感じだ。付き合えば蔑ろとかにするわけではなく、むしろ結構尽くすほうだと思う。まあ、いい男なんだろう。ただ欠点は可愛い子が好き、そういえば普通だろうと思うかもしれないが、こいつの場合可愛くて胸が小さくて、背も小さくて、と小さくて可愛い子が好きなのだ。胸が小さいはなかなか大事なポイントらしい。今回好きになった子は、鈴木 すずき 遥香 はるか ちゃん。さっき挙げた条件全てが当てはまる、所謂けいちゃんのストライクゾーンの子なのだ。

「告白するの？」

「んー、お前はどっ思う？」

「好きならすれば。断られないよ、多分。」

「おー、んじゃ、する。」

「・・・ふうん？」

次の日、けいちゃんと遥香ちゃんは見事恋人同士になっていた。

隣の『君』の気になる人。(後書き)

まあ、こんな感じ(、、)

勘違い。

そういえば、すごく遅い気もするけど自分の名前は齊藤さいとう 小鳥ことりという。個人的にはあまり好きな名前じゃない、だって小鳥って何？ぞわぞわする……。あー！やっぱりぞわぞわするっ。

「で、どう思うの？」

「……うん？」

え、何。いきなり何。相手、三樹は盛大に溜息をつくと思いつきり睨み付けた。どうせなら質問の内容を教えて欲しい。おどおど見ていた綾が助け船を出してくれた。可愛い子。

「えと……。ほら、楠木くんがまた恋人できたでしょ？今まで気になつてたけど小鳥ちゃんはどう思ってるのかなあ……。っで。」

「そうよ、あんなできすぎた幼馴染みがいたらそれしか目に入らなくなるんじゃない？」

なるほど、そういうことか。この手の質問にはもう随分と慣れた。主に中学生のときだが、けいちゃんを好きだという女子たちに何度も詰め寄られたし、友人には今のような質問でからかわれた。正直こういう質問が好きじゃない、むしろ嫌気がさす。だが自分は偉いからそういうことは一切表に出さない。

「平気だよ、確かに昔から一緒にいるけど。何故かは知らないけど寧ろ許容範囲が広くなったから。感謝してる。」

「本当に何でよ。」

「何でだろうねえ。」

何でと聞かれてもこちらが困る。狭まるどころか広がったの本当なのだ。所謂教室の日陰に居る奴らだって好きになれる。自分、やっぱり偉いかもしれない。

あ、と三樹が声を上げる。ぐい、と手を引つ張られるとそのまま歩き出される。人気のない場所に連れてこられた。何ですか、告白ですか。見上げると知らない男子生徒がいた。誰だ、この人。ああ、でも結構顔整ってる。不機嫌そうな顔立ちからして告白ではないことは明らかだ。お互い黙ったままだったが、不意に相手が口を開きだした。

「お前さあ、なんで何もしないわけ？」

「うん？言いたいことがいまいち分からないんだけど。」

「・・・だからさあ、お前。楠木啓介が好きなんだろ？なんで何もしないんだよ。」

「君、勘違いしてるよ。自分はけいちゃんのことを恋愛対象として見てない。」

ぎゅつと眉間の間に皺がよった。たまにいるんだよねえ、こういう奴が。多分、遥香ちゃんが好きなんだろう。でも、遥香ちゃんがけいちゃんと付き合ってしまったから自分にけいちゃんを取り戻す・

・？何かおかしいような？まあ、取り返して欲しいんだろ。溜息をつくとそこから立ち去ろうと踵を返す。そしてまた、手を掴まれた。

「でも、“お気に入り”であることは変わらないんだろ？」

「・・・は？」

「いつも女子たちが嫉妬するくらいベタベタしてんだ、楠木に彼女がいないときはお前が相手してんだろ。」

「は、相手？・・・何それ。」

「とばけんなよ、あいつとやってんだろ！お前だって、あいつの好みと同じ容姿してるもんなあ！？いいからさっさと」

不意に言葉が途絶えた。影が差す。その影の主に男子生徒は胸ぐらを思いつきり掴まれていた。わー、修羅場？影の主、我らがけいちやんは元から悪い目つきをさらに悪くしていた。チラッと見えただけだからよく見えなかったけど、でも多分それが一番いい。見たらきっと自分も体が竦むと思うし。

「お前、何してんの？」

「・・・っ。べ、別に何もっ」

「あー？嘘ついてじゃねえぞ、おい。」

ぶんぶんとはたすら首を振る。何だ、思ったより根性ないな。人の殴るところがみたいわけじゃないから今度こそ踵を返す。歩き出した自分の背後からうわ、と気の抜けた声がする。しばらく歩いてたがちよっと立ち止まってみる。後ろにさっきからずっとついてきた

けいちゃんも立ち止まったようだ。結局殴らなかったようだ、うんうん。いいことだ。

「・・・何言われた？内容によっては絞める。」

「うん、いや、初めて言われたことだからちよつとびっくりしんだけなんだけど。彼からは自分たちが所謂セフレに見えたらしい。」

「セフレ？何で。」

「女子たちが嫉妬するくらいベタベタしてて、自分の容姿が君のストライクゾーンだかららしいよ？」

意味分かんないね、と言うが返事がかえってこなかった。不思議に思ったから振り向くとぼつちりけいちゃんと目が合う。ふいと視線はちよつと経ったら外されたが、何だ。一体なんだ。

「自分、そろそろ戻るね。それじゃ。」

「・・・ん。」

遅刻するのは気にしないけど、綾に心配かけてるかもしれない。自分ばかりと歩く速度をあげた。

そのおかげか、歩き去る自分をじっと見ているけいちゃんには気付かなかったが。それを目撃した人には結構異様だったらしい。まあ、そうだろう。

教室に戻って、案の定心配した綾とさりげなく何もなかったかと聞

いてくれるシンデレラ三樹ちゃんと話しているうちに今朝のことなんてさっさと忘れることが出来たのです。

嫉妬

嫉妬なんてよくあることだ。けいちゃんと一緒にいれば毎回そうだが、けいちゃんと現在進行形で付き合ってる人からされることはない。前にも言ったと思うが、けいちゃんは付き合えば案外尽くすほうだ。その子が望めば他の女子たちとの接触は極力避ける。顔が良くて、今まで基本は人に平等に接していた男が自分だけを優先して自分だけを見てくれるというのは優越感がすごいんじゃないだろうか？まあ、自分はあるまりそういうの好きじゃないけど。

こういう訳で、けいちゃんの恋人は自分に嫉妬することはない。むしろ見下してくる。それでは、遥香ちゃんは一体全体何で自分に嫉妬をしているのでしょうか。曰く、啓介くんにこれ以上近寄らないで、らしい。・・・ええ？

友人だと思われる女子を2人連れて、涙目でこちらをきつと睨んでいる。・・・ええ、本当に何で？

「・・・いつも通り接してるつもりなんだけど。」

「はあ？何いってんの？啓介くんの気を引こうとしてるの見え見えなんだよっ！」

「たかが幼馴染みが調子乗んなよ？」

・・・

いい加減こういうのも飽きたなあ。最初は漫画みたいでこれすごい！ってちよつとテンション上がったんだけどなあ・・・。というか皆同じようなことしか言わないんだよね。あ、でもたかが幼馴染みは初めて言われた。たかが幼馴染み、されど幼馴染みみたいな。こ

いつらより前からずっと一緒にいるんだから遠慮がなくなるのは当たり前だろう。

「たかが」幼馴染みだからさー、遠慮なく男と意識しないで接してるんだけど。」

「嘘つくなよ。どうせ家近いからとか言って、家に押しかけてるんでしょ？」

「そうやってさあー、楠木に迷惑かけんのやめたら？」

「そーそー！昼の時とかさ遥香がいるつてのにベタベタしてさあ・・・。」

「楠木、絶対遥香のどこに行きたかったと思うんだよね。」

「ねえ、ちよつと聞いてんの？」

なんだこのステレオ攻撃。すごい苛つく。

押しかけてる？むしろ押しかけられてますが。迷惑かけてる？むしろこうやって迷惑かけられてますが。遥香ちゃんのとこ行きたかった？むしろ怯んで離れようとしてましたが。ええ、ええ聞いてますよ。聞いてますとも、ええ！

「ユウちゃん、ジュリちゃん、言い過ぎだよお。」

遥香ちゃんの間延びした声もあんまり好きじゃないな。自分はいや、自分だけだと思っけどね？（強調）けいちゃんは結構好きだと思っけどね？けいちゃんは。（強調）

とりあえず、ユウちゃんジュリちゃんペアは黙ることをしたらしい。

「あのねえ？私はねえ、啓介くんとずうっと一緒にいたいのにねえ、斉藤さんがいるせいでえ啓介くんとあんまり居られないの。だから、斉藤さんこれ以上啓介くんに近寄らないで欲しいなあ・・・と思ってる？」

「・・・ならそんな風にあいつにも言ってもらえない？」

「はあ！？あんた何、自意識過剰なこと言ってるの？あんたがいつつも近寄ってんじゃない！」

もつとけいちゃん見てようよ。自分だっていちよう気を遣ってるんだよ？もしかしたらこうなるかもしれないと思ってるさ。

とりあえず、笑っておこうと思う。友人曰く、苛ついているときの自分の笑顔はそれなりに怖いらしい。それなりに。

願い通り、ユウちゃんかジュリちゃんのどっちは肩を揺らせて押し黙った。

「自意識過剰って、何？むしろ遥香ちゃんと付き合えば、って背中押してやったの自分なんだよね。なのにどうして自分が嫉妬しないといけないわけ？意味が分からないな。」

3人は驚いたように自分を見る。はは、目がまん丸だあ！。異様な沈黙が自分たちの間に流れ始めた丁度そのとき。

「小鳥、いるかーって・・・あー、何してるの？」

この話の原因が携帯を手に持ちながら教室の中を覗いていた。まあ、けいちゃんには異様に見えるだろう。自分は溜息をつくと遥香ちゃんと、・・・ユウちゃん（でいいや）の間を通り抜けるとけいちゃんが持っていた携帯を（乱暴に）取る。携帯を操作して携帯から自分の連絡先を消した。けいちゃんがそれを怪訝そうにみる。

「お前、何してんの？」

「・・・何かさあ、遥香ちゃんがけいちゃんが自分と関わっているのが嫌らしいんだよね。」

「あー・・・、へえ。それで？」

おい、こいつ今にやけたぞ。けつ、恋は盲目ですか！（やさぐれ

「でも、家とか隣同士だし顔合わせちゃうでしょ？だから携帯から自分を削除。」

「あー、なるほど。いや、でもさ」

「詳しいことは、その3人に聞いてね。それじゃ。」

けいちゃんが何か言いたげだけどいいや。さあ、帰ろう！愛しの我が家へ！

ふと、時計を見上げる。あ、もうこんな時間か。買い物行かないとなー。外に出かける準備をする。もうそろそろ冬だ。出来るだけ暖かくしよう。

外に出たとき、隣のけいちゃんの家の前（というか玄関の前）に誰かがいたようだ。がけいちゃんの家はあいにく留守だ。伝える義理もないし、留守だと分かれば帰るだろう。それにしても見覚えのある服だったなあ……。

あ、今日鍋にしよう。

鍋の具材を買ったし、新しいお菓子も買ったし、寒いことを除けばちょっと良い日かもしれない。……良い日だよ、ね？ うん。いいよ、明日は休みだし。今日のこと精一杯友人たちに言いふらそう。自分はそう心に誓いをたてた。

家の前についてちょっとびっくりした。だって、多分自分が買い物に行く前いた人がまだけいちゃんの家の前にはいたからである。……ええ？ しょうがないから話かけることにした。

「留守の家の前で何してんの？」

立っていた男に話しかける。ゆっくりと男は振り返る。そして何故か見つめ合う。類は友を呼ぶ？ この男、随分と整った顔をしてやがる。男は相変わらずこちらをじっと見ていた。

何か、面倒なことになりそうだな……。

友達の友達は、
(前書き)

みんな友達。

友達の友達は。

「・・・自分の顔そんなに変ですか。」

「・・・いや、むしろ愛らしいと思」

「その家留守だから、さっさと潔く帰った方がいいと思う。」

ふう。幻聴が聞こえやがったぜ。自分もさっさと帰ろうとして手を掴まれた。思いの外冷たくて余計に驚いた。・・・自分にどうしろと？ 掴まれた手と、男を交互に見ると溜息をつく。手を（乱暴）に振り払うと、家に入る。玄関に荷物を置くとある紙を取ってまた外にでる。振り向いた男を無視してけいちゃんの家ドアノブに掛けた。所謂、ドアノブカードというヤツだ。どちらかの荷物、もしくは友人をこちらの家で預かっているという意味を表す。ちなみに自分の自作だ。友人に関しては共通に限るのだが、いつ人が帰ってくるか分からない家の前に人をずっと放置しておけない。しかもこんな寒空の下に。自分って偉い。

男の前に戻ると、家においでと声を掛けた。男は黙ってついてきた。

「それで君って、けい・・・すけの何？」

「・・・多分、友人だ。」

「何で留守の家の前ですつと待ってたわけ？」

「今日、楠木の家に泊まる予定だった。留守なのは分かったから帰ろうと思ったが、家の鍵をどこかに忘れてきた。」

「……それは、大変だね。」

見かけに合わずドジっ子なのか。やめてくれ、萌えないぞ。全然。まあ、ゆっくりしていいと伝えてくれと伝え、台所に向かう。といっても鍋だからいつもより手を抜ける。今の時間留守ならけいちゃんの夕食は多分自分の家で食べるだろうと思い、二人分買ってきておいた。これはもはや癖だ。でも今考えてみると多分あいつは愛しの遥香ちゃん夕食を食べるもしくは作ってもらうだろう。必要なかったということになるが、けいちゃんの友人のお陰で買ってきた物が余ることもないだろう。……食べてくれる、よね。

よし、準備完了だ。

ソファに座っていた男に近づく。

「今日は鍋です。」

「?……ああ、そうなのか。」

男はどうやら一緒に食べるという選択肢がないらしい。動こうとしなかった。言葉が足りなかったと反省する。(棒読み)

「何も食べてないんだろう? よければ一緒に。丁度二人分くらいあるんだ。」

男は少し目を見開いた後、立ち上がった。

男の名前は、佐藤 怜というらしい。見覚えがあると思った服は制服で、自分の隣にある有名な進学校のものだった。けいちゃんが関わらないと思ってた学校だ。だって真面目で頭がいい人ばかりの学校だから。お泊まり会をする程度にはけいちゃんと仲がいいらしい。今は家に親が居なく、手持ち金もあまりないとのこと。自分が幼馴染みだと言うとそうだと思ったと言った。どうやら少し話を聞いたらしい。一体何を話したのか気になるが。

「話に聞いた以上に、魅力的だ」

「あ、そういえば今日けいちゃんが帰ってこなかったらどうするの？」

気になったことを聞いてみた。何か言っていたような気がするけどまた幻聴だろう。怜（名前で呼んで欲しいと言われた）は少し考えたあと、自分とまた目を合わせる。・・・こいつと目を合わせたくないと思う。だって、何というかじつとりというかねつとりというかすごいんだよっ。

「出来るなら、泊まらせてもらいたい。」

「・・・うん、そうなると思ったよ。」

「すまないな。」

謝るが、どことなく嬉しそうに見えなくもないのは気のせいだといいな。殴りたくなるから。

「新しい彼女が出来たからきつと、浮かれてるんだろっなー・・・。」

「そうだな、自慢話はうんざりするほど聞かされた。写真も見せられた。」

「へえ？君はどんなタイプが好きなの？」

「・・・あまり決まっていらないな。強いて言うなら
「やっぱりいいや。」

目が何か危ないよ、何でそんなに熱っぽい目で見るんだ！やめてくれ！早くけいちゃん、帰ってこないかと願っていたときに丁度よく玄関が開く音がした。その後足音がしてリビングに入るためのドアが開く。思った通りけいちゃんが立っていた。

「おー、鍋？」

「うん。あ、でももうないよ。」

「・・・何で。」

「えー？君、愛おしいカノジョ様に手料理振る舞ってもらったんじゃないの？」

「あー・・・、上手くなかった。」

ちよつと顔をしかめて言う。我慢できないくらい美味しくなかったらしい。ざまあみやがれと笑ってやった。（心の中で）けいちゃん

は怜のほうへ向いた。

「悪かったな、家留守にして。」

「覚えの悪いお前のことだ、予想はしていた。してただけだった
が。」

「あー・・・、ホントわり。」

君が鍵を落とさなければ良かったんだと言いたいのをぐつと押さえる。席を立つと台所に向かう、簡単なものくらいなら作れるだろう。あ、パンがある。仕方ないからサンドイッチを作ってやる。立っていたけいちゃんに手を洗うように言う。おー、と気のない返事をしていた。

ぼけーっとサンドイッチを食べる男とそれを眺める男を見る。写真取ったら売れそうだな。というかモデルとかやらないのかな、売れると思うんだけどなー・・・。視線に気付いた怜がこちらを見つめ返してきた。じっと見返すと、じっと負けじと見返してきた。

「・・・あー、何してんの？」

「逸らしたら負けの気がして。」

「小鳥は、愛らしいな。」

げぼつとけいちゃんが隣で咳き込んだ。自分はひつと声が漏れたまま固まる。幻聴？いや今言った。今まで阻止したのに！ポロリと簡

単に言った！

「お前ってさあ・・・、そんな簡単に女口説くヤツだっけ？」

「まさか。お前じゃあるまいし。」

「・・・んじゃ、何で。」

「そう思ったからに決まっているだろう。お前は今恋人がいるんだろう？小鳥に何を言ってもいいだろう？」

しても！？今、してもって言った！？な、何言ってるのコイツ！
けいちゃんは食べかけのサンドイッチと鞆を持ち、立ちあがった。
不機嫌そうな顔をしている。コイツも何があった！

「俺ん家に移動。」

「分かった。小鳥、世話になったな。また来る。」

また来るって言ったよ！コイツ！

不機嫌そうなまま歩き出すけいちゃんと、相変わらず無表情の怜を
呆然と見送った。

友達の友達は。
(後書き)

隣の家の『君』と隣の学校の『君』そろいましたねえ。

学校にて。

何か疲れたなあ……。溜息をつきたいのをこらえてそつと吐き出す。……。これって溜息じゃない、よね？

「何溜息ついてんのよ、鬱陶しいわ。」

「……。ごめん、こらえたつもりだったんだけど。」

「あはは、何か一回飲み込んだよね。……。えつと溜息を？」

「何で自分の言ったことを疑問に思うのよ。」

「あうう……。。」

この2人は自分の心のオアシスだ。このやり取りを見てると心が和む。三樹が視線に気付いたらしい。気持ち悪いわね、こっちは見ないでくれるホント気持ち悪いわ。みたいな目で冷めた目で見てきた。そつと視線を逸らす。もちろんああいう目で見られて喜ぶマゾではないからである。地味に傷つくのである。

昨日あの後、当然だが謝罪も何の連絡もなかった。そう、謝罪もなかった（此处重要）。個人的にはもっと誠心誠意を込めて謝って欲しかったのだが、そんなことをするほどけいちゃんには自分に遠慮というものを持っていない。一体何時捨ててしまったのだろう。早急に拾ってきて欲しい。何だかちょっと悲しい気持ちで鍋とサンドイツチが載っていた皿を片づけた。

自分は所謂、日常というか平凡というか一般的な普通なのが好きだ。もちろん芸能人に会ってみたいとか、明らかに今の自分じゃ叶えられないことに思いをはせるのも自分にとっては普通である。憧れるという行為は普通だからこそ出来ることだと自分は思っからだ。だが、残念なことに自分は少し一般的な普通とは違う。言わずもがな、けいちゃんのせいだが。けいちゃんの容姿のせいで美形というものにある程度慣れたし、嫉妬だとか羨望だとかも嫌と言うほど受けたし、けいちゃんのツテで明らかに一般人じゃないようなちよつと怖い人たちと関わったこともある。これまたその人たちのツテで芸能人に会えたかもしれない。自分は断ったが。（生の芸能人を見てきたけいちゃんの反応は、案外普通、というものだった。何が普通なのかちよつとだけ悩んだ。）このようなことが幾度とあった、当然自分はそれらを受け入れる、そして気付く。これに慣れてしまつたら自分も【普通】じゃなくなってしまう、と。だからけいちゃんとは1歩は無理だったが半歩くらいの距離感で付き合ってきた。まあ、自分が望んでいた【普通】には近づいた。

けいちゃんの友人という怜。彼は絶対面倒だ。早急にどうにかしなければならぬ。本当に切実に。そんなところで新たな問題である。

ちらりと隣を見やる。そこに座るのは今日やってきた転校生。最初は転校生の話題で持ちきりだったこの教室も転校生が暗い、という人を寄せ付けぬというかそんな子だったからいつのまにか転校生からいつもの話題へ移っていた。もちろん、三樹や綾でもある。だが、だが。自分は先程からこの子が気になって仕方ない。何とつかけいちゃんや怜のような一般人とはちよつと違った雰囲気を持っていてというか……。こういう勘は大抵当たるモノだ。ちらりとまた転校生を見る。真っ黒い髪は肩につくくらいの長さで、

前下がりの髪型をしている。その目は鬱々とした光をともし、何処かを見ていた。が、ふとその瞳がこちらへ移動してくる。ぱちりと目があった。……。ふいと視線を外して綾たちのほうに向き直る。多分転校生からであろう視線は容赦なく背中に突き刺さっていた。

つけられる。

ばたばたと足早に廊下を通る。後ろには不安そうな顔をした綾と不機嫌そうな三樹がついてきている。そして少し離れたところに一定の距離を保ってついてくる転校生がいる。・・・さっきから何なのさ？

「・・・ま、まだついてくるよっ」

「何でかな・・・」

「ああもう鬱陶しいわ！あんたの後をつけてるんだからあんだがどうにかしなさいよっ！！」

とうとう切れた三樹が小さく叫ぶ。どうにかって言われたって・・・どうしようも・・・。自分はその怒りに答えず、一層早く足を動かした。角をまがろうとしたとき、どんと誰かに体当たりをしてしまった。思わず、足を止める。綾たちも同じように止まった。

「・・・いてえ。」

「あ、ごめん。ちょっと急いでて。・・・平気？」

ぶつかった相手はけいちゃんであった。かなり不機嫌そうな顔である。ぶつかったくらいでこんなに怒る人じゃないから、多分遥香ちゃんとかあったんだろうか。いや、ただの幼馴染みの勘だけど。ちなみに背中に突き刺さる転校生からの視線はそのままである。ぽ

んと方を叩かれる。見れば三樹がにんまりとした顔で口を開いた。

「ちょうどいいし、頼りになる幼馴染みに何とかしてもらいなさいよ。それじゃ。」

と、けいちゃんの不機嫌顔に怯えてる綾を引っ張って、来た道を戻っていつてしまった。……。ええ何それ！？……。ええ！？は、薄情者っ！思わず振り向いたらばっちり転校生と目があってしまった。何の感情もない瞳がこちらを見つめている。ゆつくりと元の方角を見ればけいちゃんはその転校生を不審そうな目で見ていた。い、移動すべき……。だよね。ぎこちなく歩き出した。けいちゃん（と転校生）が当然のようについてきた。どうしよう、何処に行けばいいのこれ……。 （げっそり）

行き先は自然と屋上になったというかそこしかなかった（またもげっそり）。重たい足取りでひたすら階段を上る。さきほどからけいちゃん是不審な目から苛立った目に変わっていた。そしてちらちら見るのをやめてガン見しながら階段を上っている。前見て歩かないと危ないよ。そしてそんなガン見にもめげず自分をひたすら見つめ続ける君もすごいよ、転校生。だがあの無感情の瞳で見られても不快というか嫌な気持ちになるだけだった。残念ながら。というかどうしてこんなに見られてるの、疑問だ。あ、けいちゃんが躓いた。

とうとう屋上に着いたわけだが、これからどうすればいいのか。階

段を上っている途中に始まってしまった授業に戻るにしても転校生が待ち構えているあの出入り口に近寄るのは気が引ける。・・・うわー、自爆ってこういうことなのか。

「・・・なあ、何であいつさつきからお前のことつけてるわけ？」
「こつちが知りたいくらいだよ・・・。」

身を寄せ合ってあからさまなヒソヒソ話をする。遥香ちゃんがいれば絶対怒るであろう顔の近さだがぶつちゃけ今はそんなのどうでもいい。だが意外なことに転校生まで怒り始めた。あの無感情の瞳に怒りの感情を浮かべてこちらに歩み寄ってきた。音もなく。傍までくると自分の腕を掴み引つ張ってきた。

「やめて。」

一言だけ言い放つ。一気にけいちゃんの眉間に皺が寄った。・・・すごい、迫力だよ。怖いから少しだけ視線をずらす。怯まずそれを見つめる（睨み付ける？）転校生に心の中で拍手だ。

「おい、その手え放せよ。」

「いや。」

「は？いやじゃねえよ。つーかさつきからついてきやがって気持ち悪いんだよ。」

「黙って。あんたについてきてるわけじゃない。」

「あゝあ？」

けいちゃんの手が転校生へと伸び、胸元をがっと思む……。のを寸前で止めた。

「ちょっと、やめなよ。何でそんな喧嘩腰なわけ？」

転校生は相変わらずの無表情。けいちゃんは顔を顰めた。自分が掴んでいた手を逆に掴むと引き寄せる。おいおい、遥香ちゃんに見られたら自分どうすればいいんだよ、黙っていじめられろって言うのかい！

と、もう片方の手を転校生が掴んだ。おいおい、一体何なんだよ自分の腕をちぎりたいのかい！自分は玩具じゃないんだよ！（ケツ

「あー、もう放してよ。」

半ば無理矢理に振り払うと1歩2歩と後ろに下がる。少し距離をあけた。・・・何だってこんなことに。これが果たして一般的な普通なのか？いいや、まさか！そもそもけいちゃんだつてむきになりすぎなんだ。君には遥香ちゃんという可愛い恋人がいるじゃないか！まあ、まずは転校生だ。

「ねえ、何で自分の後をつけるわけ？さすがに嫌になってきたんだけど。」

苛立ちを含んだままの言葉を投げる。 けいちゃんと一緒にまっすぐ見つめる。

やがて転校生はゆっくり口を開いた。

つけられる。(後書き)

転校生の名前を出すタイミング見失ってしまいました。

こんな理由。こんな過去。

「ねえ、何で自分の後をつけるわけ？ さすがに嫌になってきたんだけど。」

しばらく黙っていた転校生は、無表情のまま口を開いた。

「貴方が、ゆっちゃんだから。」

•
•
•
•
•
•
○

-
-
-
-
-
-
-
- ?

うん？

「はあ？」

「あー……、確かに言われてみれば……うん、ゆっちゃんだ。」

「ゆっちゃんを知ってるの？」

「ん、まあ……一番好きだな。」

「以外。ちょっとだけあんたのランクが上がったわ。やかんからドラム缶くらいに。」

「いや、それどんな基準だよ。意味わかんねえ。」

「いやいや、むしろ君たちこそ意味分かんないよ。」

正直に言ってやると、けいちゃんは少し視線を逸らした。転校生はまっすぐこちらを見つめてくる。

「ゆっちゃん。」

「いや、ゆっちゃんって誰なのさ。」

「それは貴方。」

「・・・名前に“ゆ”なんて一文字も入ってないんだけど。」

「いいえ、貴方はゆっちゃんよ。」

続けようと思えば、ずっと続きそうだったので黙る。まさかここまです話が通じない人だったなんて。その上、人の後をつけるというストーカー行為とも言えることをしている非常識人だ。だがけいちゃんとは話を通していた。まさか今この場では自分が非常識な人間になっているのだろうか。いやまさかそれはないだろう。黙ったままけいちゃんを見る。視線を感じてチラッとこっちを見たけいちゃんは少し溜息をついた。

「んー・・・と、ゆっちゃんは“小林 ゆとり”って名前です。につきアイツをフルボッコ”って名前アニメのキャラクター。あまり出番もないし、見た目もそこまでよくない。ランキングでも中途半端にいるようなキャラ。」

「それでも一部の人間にはかなりの人気を得てるの。」

「・・・一部の人間って主に。」

「ロリコン。」

即答でそう答えた転校生を見た後、さっき何気に一番好き発言をし

ていたけいちゃんを見る。もう視線を逸らすどころか背を向けていた。・・・そういえば、けいちゃん秘密の引き出し（複数存在）にはとつてもマニアックなものが一杯詰め込んであった気がする。・・・！そうか、これが所謂隠れヲタク！

自分にまで隠していただなんて、ちよつと寂しい気分にもなったがけいちゃんももう大人ということだろう。ちなみに自分は中1くらいにはけいちゃんにアレコレ報告するのをやめていた。さらにちなみにけいちゃんは今でも新しいことを始めたり、彼女が出来たり別れたりすると報告してくる。あ、話がそれたね。

「・・・つまり、そのロリコンのストライクゾーンなキャラに自分がそっくりだと。」

「あー、そうな「いいえ、貴方はゆつちゃんよ。」・・・遮んによ、それにゆつちゃんはあくまでもアニメのキャラクタ「黙って。ゆつちゃんは実在したの。貴方はドラム缶からヤモリに格下げ。」・・・だから基準が分かんねえよ。」

大分けいちゃん言葉を遮りながら、転校生がいう。まさかそんな理由でこれまで、いやこれから付き纏われなければいけないのだろうか。そんな冗談じゃない！

「君はどうかしてるよ。別に現実の世界と仮想の世界と一緒にするのは構わないけど自分を巻き込まないで欲しいね。」

「君じゃない、七海^{ななみ}。」

「・・・七海、自分を、アニメのキャラと、被せるな。」

ゆつくりと区切りながらそう言う。まっすぐ見てからどこことなくつとりとしていた転校生、もとい七海は目を潤ませ恍惚とした表情で溜息をついた。・・・分かってないな、こいつ。

くそ、冗談じゃない。変なことをに巻き込まれるのはごめんだ。まっすぐ屋上の出口に向かって走り出した。後ろからけいちゃんのかぶ声が届く。そして自分が続いて走り出す音も。それが七海が追いかけてきたからだと分かるのに時間なんていらなかった。

今までにないくらいの速さで階段を下り廊下を走り抜け靴を履き、鞆を忘れたことを頭の片隅に思い浮かべて、学校から飛び出した。

見たことないくらいの速さで学校の校庭を走り去る幼馴染みを屋上から見送る。

・・・まさかこんなところでヲタクだとばらすことになるとは思っても見なかった。だが、につくきアイツをフルボッコ 略してにつくボッコを知ってる人間なんてそうそういない。それくらいマニアックなアニメだ。それを知っている同志をやっと見つけられたんだ。・・・まあ、何かすんげー変なヤツだけど。

改めて、自分の幼馴染みである斉藤小鳥について考える。

あいつのことははっきり言って大好きだ。家族以上に身近だし、家族以上に大切に思っている。中2くらいになるとなくなったが、俺は父親から虐待を受けていた。母親は見てるだけ。妹は機嫌取りに

必死。

避難先はもちろん小鳥の家だった。小鳥と、小鳥の家族はそんな俺を匿ってくれた。一時期は優しい家族を持った小鳥に嫉妬して辛く当たったりしたが気にせず俺を助けることに一生懸命だった。（だが中3くらいになってそのときの仕返しを受けた。あいつは根に持つしネチネチしてる。）

そんな小鳥がひとりになったのは何時だっただろうか。

確か中1くらいに小鳥の父が事故で死んでしまった。すんごく悲しかったし、珍しく大声で泣きじゃくっていた小鳥と一緒に泣いた。その後、中2になって虐待もされなくなって小鳥と一緒に遊び歩いていた俺が、中3に久々に小鳥の家族、小鳥の母に会いに行ったとき。今は丁度留守だからと嫌がる小鳥を押さえ込んでリビングで待っていた。ずっと。日が暮れて、夜になって、朝になって、また昼になって、日が暮れて。そのくらいになって小鳥が急に泣き出した。父が死んだ時みたいに大声で泣きじゃくった。もう、お母さんは帰ってこないんだ、って。

中2の俺への虐待がなくなったところに小鳥の母が出て行ってしまったらしい。置いてあった手紙には簡単に言えば、他の男のそこへ行く。毎月仕送りはあるらしい。必要な書類も送れば、諸々を記入して送り返してくれるらしい。だが会いに行くことも来てくれることもないらしい。

泣きじゃくる小鳥を呆然と見ながら、今までそんな素振りも全く見せなかった小鳥に単純に驚いていた。ただただ、驚いて呆然と小鳥を見ていただけだった。

しばらくして泣き止んだ小鳥に今更だが大丈夫かと聞いてみた。どこなくすつきりした小鳥が言った。

「けいちゃんがいるから、大丈夫。」

次には俺が泣いていた。

そんな小鳥に、最近とある感情を抱く。もつと話したい、触りたい、キスしたい、あわよくばその先へ――そんな感情だ。

これは恋というヤツなんだろう。今までカノジョたちより比べものにならないくらい強い感情だし今のカノジョは俺の気持ちがいかに強くないかというためのものだ。この気持ちに気付いたのはごく最近。前以上に小鳥が可愛く見えて仕方ない。おまけに怜というゴミがくつついてきた。だから悩む。

そう悩むんだ。小鳥は言った。俺がいるから大丈夫だと。つまりそれは俺という家族とも言えるものがあるから大丈夫ということなんだろう。小鳥と俺の今の関係を崩してしまっているのか。

俺は悩む。

こんな理由。こんな過去。（後書き）

転校生の名前。小鳥ちゃんとけーすけくんの過去。アニメの名前（これ重要）。

不運な自分。

もういい加減足に力が入らない。だからといって足を止めれば必ずヤツが追いついてくる。くそ、あれもチートキャラなのかけいちゃん仲間なのかよ。いい加減にして欲しい。もしかしてこれってチートキャラを引き寄せる自分の体質なのか？・・・いいや、まさかそんな！ありえないよね・・・ね？

人混みの中を走るのは危ないし、それ以前に人に奇異の目で見られたくないから却下。という狭いビルとビルの間。人気のない路地裏や閑散とした住宅街。店の中に逃げ込むことも考えたが逆に追いつめられる気がする。もういつそのこと人の家にも上がり込むか。ほら、小学校の時とかに教わっただろう、近所の皆さんは味方です助けを求めましょう！みたいな。でもあれって結構迷惑だよね、押しかけられたご近所さんにしたら。

あれ、何かクラクラしてきた。酸欠ですか、過呼吸とかやめてよ本当に。必死に休める場所を考えてみたが思いつかなかった。何処に行っても捕まるイメージしか思いつかない。用心深い自分の思考が恨めしい。

ちらりと、後ろを見ると誰もいなかった。・・・あれ。徐々に速度を落とす。が、そこで後悔した。もう足がぐくぐくで力が入らないつまり、もう走れないということだ。小さく悩むと近くに小さな公園があった。ふらふらとそこに向かって歩き、人目につかない場所にあったベンチに座る。・・・何かもう、駄目だ。もう絶対立てない歩けない走れない。見つからないことを祈るばかりだ。そっと目を閉じた。

肌寒さに目が醒めた。……まさかこんなところでこんな状況で寝ちゃうなんて、不覚だ。しかも寒い。肌寒いどころじゃない寒い。あんなに走ってかいた汗が乾いていた。制服のシャツがほんのり湿っていてさらに気持ち悪い。寝たはずなのに体が更にだるくなっている。動けないし動きたくない。携帯……は今日に限って鞆の中だし、そもそも誰に連絡すればいいんだ。けいちちゃんのはメモリから消去しちゃったし、覚えてるわけもない。親は……うん、ないな。何だか泣きたくなってきた。そもそもどうして追いかけれなくちゃいけないんだ。怖かった、あの無表情でだが目だけは爛々とまるで獲物を狩る猛獣の如く光ってた七海はとても恐ろしかった。こう考えてみると自分は最近、ひどく不運な気がする。セフレに間違われるわ、遥香ちゃんたちに呼び出されるし、付きまとわれて追いかけてこの様だ。

何でけいちちゃんの連絡先を消さなくちゃいけなかったんだ。どうして消しちゃったんだ、親に頼れない以上、自分にはけいちちゃんしかいないのに。けいちちゃんもけいちちゃんだ。どうして、……みつともないなあ、自分。ずずつと鼻水をすす。溢れた涙をこする。そのことで腕で覆ってた目が周りを見れるようになるわけで、中途半端に手を上げたまんまの怜が視界に飛び込んできたわけで、……お互いしばらく硬直したまま見つめ合ったわけでした。

「……助かったよ、ありがとう。」

「いや、気にしなくていい。この前の礼だ。」

場所は怜の家。暖かいシャワーと洗濯機を貸してもらったうことになった。けいちゃんの家泊まったときみたいな感覚だったせいかな物凄く後悔した。何故って・・・着替え。下着まで洗ってしまったのは後悔どころじゃない恥ずかしい。恥ずかしすぎて怜の顔を見たくない。ああ、絶対図々しいヤツだと思われたんじゃないか。違うんだよ、普段はこんなんじゃない・・・！やめてくれ何でそんななま暖かい目で見えるんだ。そりゃ、貸してもらった服は大きすぎたさダボダボだよ！まるで子供が大人の服を着たみたいだよ！だからって何だ、別にいいじゃないか！

けつとやさぐれる。出来るだけ怜から離れよう。だって、自分今下着何もつけてないし、怜の長袖を着てるだけだズボン穿くのは何だかちよつと抵抗がある。そう考えるだけで何だか死にたくなってきた。恥ずかしい、恥ずかしい。・・・何だよ、やめる近づくなあっちへ行ってくれ！だが怜はお構いなしに近づくところう事が抱きしめてきやがった。110番するぞ。

耳元に顔を近付けた怜はそつと囁く。何故泣いていたのか、と。

「空が青くて広すぎて思わず涙が。」

「・・・そうか、広いが曇っていて残念だったな。」

「大量の汗が一気に目に突撃してきたんだ。」

「・・・そうか、全ての汗が乾いていてひどく寒そうだったな。」

「世の中が冷たすぎて思わず。」

「・・・そうか、大変だったな。」

ぎゅつと抱き込まれると同時にそつと頭を撫でられる。あ、あったかい。あれ、何だか随分と心地がいい。思わず、うとうと目を閉じた。が。頭を撫でていないもう片方の手が不穏な動きをし始めた。

「何、通報してもいいの？」

「・・・無防備なお前を心配してな。」

また囁かれると体がびくりと跳ねた。だってさっきより近い、というか耳に唇がくっついてるんだよね、これが。

「っそりや、どうも。もういいから離れてよ。」

今下着つけてないんだよ馬鹿野郎、という言葉こそつと喉の奥に押し込んだ。

「好きな人間に自分の服を着てもらうというのは、思ったよりクるな。」

何処にだよ!?

やめてよ何だか大人な雰囲気か漂ってきたよ。っておい、何処触ってるんだ。抵抗してもその意味は全くないのがすごく悔しい。

「・・・そんなとこ触って楽しい？」

「ああ楽しい、それに可愛らしいな、舐めてい」「本当に通報するよ?」・・・事実だ。」

尚更悪いよ、変態。つ、と服越しに胸の頂をなぞられる。びくつと体揺れた。

「ね、ね。やめって、よ。へんたっ・・・うん」
「声も愛らしい。もっと聞きたい。」

ぞわぞわとした感覚が背筋を上ってくる。何だか頭がぼーっしてきた。いやこれはくらくらしてきた、のほろが正しい気がする。体もだるい動きたくない。でもだからといって、まだ会って2回目の男とするつもりもないし、それにちよつと怖い。・・・いや、かなり怖い。

「ひっ・・・ん。やあっ」
「・・・小鳥。」
「んや、こわ・・・怜、怖いっ」

今日はちよつと弱気な自分が怖いと言った瞬間、怜が物凄い勢いで離れた。ちよつとぽかんとする。

「悪い、少しいやかなり調子に乗った。許してくれるか？嫌いにはならないでくれ。」
「・・・それじゃ最初からやるなよ。」
「すまない。」

そう狼狽えながら言い、離れていく怜に少しほつとする。・・・それにしてもくらくらする。さつきより酷い。あれ、これくらくらよ
りぐるぐるだぞ。ぐるんぐるんと回る世界に吐き気がする。バラン
スをとれなくて、横に倒れる。怜が自分を呼ぶ声がした気がしたが、
気を失った自分が確かめられるわけもなかった。

唐突に横に倒れた小鳥に慌てて近づく。少し躊躇った後、抱き起こ
してみると体が随分と熱い。

「・・・熱か。」

ぽつりと呟いたが、その後すぐに小さく呻く。抱きしめているとき
は只単に羞恥によるものだと思っていた。都合良く解釈した俺なん
て2階から飛び降りて死ねばいい。

そう考えた後、小鳥を見下ろす。小鳥にとっては大きいといえ、長
袖から大分足が見えていた。白い足が眩しい。触りたい、あわよく
ば舐め回したい。

「・・・生殺し。」

そうぽつりとまた呟いた。

不運な自分。(後書き)

佐藤 怜。言わずもがな変態であります。

風邪。

億劫だったか仕方なく目を開けた。

変な夢を見た。さすが夢、何か色々ぐちゃぐちゃに混ざっていた。見た目は今と変わらないのに中身が幼児化している怜に、あれが欲しいとうさちゃんのぬいぐるみを指さしながら自分にこねるけいちゃん。あの無表情が嘘のようにキラキラの笑顔でポケットティッシュを配る七海。そして、それを微笑ましげに見る母と対照的に悲しそうな父がいて。・・・何だろう、すんごくカオスな夢だとねこれ。

おとーさん、悲しい顔しなくても自分は別にそんな・・・。いやまあ、不運だと嘆いたけど。だって・・・ねえ？（盛大に溜息

改めて部屋を見渡すと、そこは見慣れた自分の部屋だった。怜の家でそれこそ色々あつて最後に意識失ってしまった筈なのですが・・・。まさか怜が運んでくれたんだろうか。

怠い体を起こして、もう一度見渡す。あー、頭ぐるんぐるんするふと、机の上にメモらしきものを発見した。フラフラとそこへ歩み寄り（自分としてはまっすぐ歩いて）メモを取る。

この雑で汚い男らしい字はけいちゃんだね。怜から連絡受けて家に連れ帰ったこと、冷蔵庫におかゆがあることが書いてあった。・・・おかゆ。今食べれる気分じゃないことが惜しい。けいちゃんの手料理なんてそうそう食べれないのに。というか人に作ってもらえること自体少ないのに。・・・。

ちよつと虚しい気分になった。そっぴや風邪薬あつたかな。あまり風邪を引かなくせに一度引くとひどいし長いしで、辛いんだよねえ。何というかすごい執拗というか。

・・・病院に行こうかな。ああ、でも寝たい。怠い。辛い。おええつ。

そして病院にいる。

ひどく悩んだが、やっぱり診察してもらったことが一番だろう。外に出てすぐに後悔したが。いつも以上に病院が遠く感じた。けいちやん帰ってくるの待てばよかったかな。って思ったり。

受付を終えて待つ。平日なおかげかすいていた。痛む頭に少し顔を顰めて、椅子に不覚腰掛ける。すぐに隣に誰かが座った。こんなに椅子が空いてるんだから、他の椅子に座ればいいのに。何となくちらりと見たあとすぐに目をそらした。

何故か。決まっている相手もこちらを見ていたからだ。知らない人。しかも何かすんごく美形だった。目の端でも分かる派手な色だ。金髪に、ちよつとだけ見た目は碧だった。つまり、外国人。

やめろ、何でそんなに見るんだ。その口は何だ飾りか最近見られてばかりだよ畜生！

結局、熟女な看護婦さんに名前を呼ばれるまで視線が逸らされることがなかった。・・・あの変なアニメを知ってるやつじゃあるまい。七海タイプじゃないことを祈るばかりだ。

診察結果は、インフルエンザでした。薬を貰って家路につく。病院から歩いてしばらくしたとき、けいちゃんがバイクに乗って通りかかりました。遥香ちゃんを乗せて。

・・・へー、幼馴染みが熱で大変なときにカノジョさんとラブラブですか！（ケツ

更に不快な気分になって気にせず、歩くことにした。

「おい、小鳥！お前こんなトコで何してんだよ。」

「病院。」

「はあ？おとなしく家で寝てろよ馬鹿！」

むっとしてけいちゃんを睨み付ける。何でそんなことを言われなくちゃいけないかよく分からない。だって薬なかったんだから仕方ないじゃないか。

「・・・別に君たちの邪魔してるわけじゃないんだからいいだろ。」

溜息をついてさっさと歩き出した。

後ろから遥香ちゃんの間延びした声が聞こえる。・・・ああ、不快だ。気持ち悪い。何で自分がこんな、惨めな気分にならないといけないんだ。

自分も恋人作ろうかな。頑張れば、付き合ってくれる人いると思う。多分。

ぐいつと手を掴まれる。その拍子に頭が揺れて気持ち悪かった。・・・くそ、何なんだよ。睨もうとしてが、頭にヘルメットを被せられて中断することになった。

ちよつと乱暴に後ろに寄せられて、小さい行くぞ、の合図でバイクが発する。

後ろから遥香ちゃんのわめき声が聞こえた。

「ちゃんと携帯に俺の連絡先入れ直しといただろ。連絡くれりゃ、送り迎えても何でもするし。怜にだって連絡入れれば学校早退してまでやると思うぜ？・・・頼むから、こういつときぐらい頼ってくれよ。」

別に頼が緩んでるのは嬉しいわけじゃないからね？

何というかほら、・・・そう！遙香ちゃんざまあって思ったただけだからね！？（落ち着け）

それぞれの思考

「頭痛いような…気がする。」

「気がするじゃねえよ、馬鹿が。」

「ふん、何さ。君が病人の自分をおいてカノジヨとイチヤイチヤしてたんだろ。」

「…別に、そんなんじゃないよ。迎えに来いってうるさかったんだよ。」

へー、と気のない返事を返す。

結局遥香ちゃんより優先してくれたのだから、まあ、許してやるう。

もそもそと布団の中にもぐる。あー、頭いたい…。

あ、そうだと思い出し布団から目の辺りだけを出す。

「あの、あ、ありがと…う。」

「……………別に。」

いつもより長かった沈黙。な、なんだよ。お礼言っただっていいじゃないか。そもそも君がずっとこっち見てるからだろ。せめてベッドの隣に座ればいいじゃんか！お陰でどもっちゃったよ。（ため息）さっさと布団の中にもぐりなおした。

けいちゃんはいしばらくベッドの近くにいたようだが、ドアが閉まる音がしたから出ていったのだろう。

よし、寝よう。

冷蔵庫のなかを覗くとお粥が置いてあった。

何だよ、一口も食べてねえのか。大丈夫か、おい。

熱が40度近くあったらしいから仕方ないのか？

アイツが風邪引くなんて珍しい。最後に引いたのは何時だったか、まだ小鳥の母がいたときだったような。

ひねくれてっから普段あまり甘えない分、風邪だとかそういう時に目一杯甘える。その甘え方がこれまた可愛かった。

ひとりやだと怠い体を必死に動かして小鳥母を追いかけてたり、小鳥母の膝に額をぐりぐり擦り付けたり。しがみついたまま眠りについたり。・・・あ、やべ、にやけてきた。

にしてもなあ・・・、小鳥母、一体何で出ていつちまったのか。

嫌いになりたくはないが、小鳥があんなに泣くくらい傷付けたわけだしそれに親なのに子供を捨てるという行為があったし嫌いになっちまうよな！。

小鳥は一体どう思ってるのか。全然わかんねー。アイツこういうの隠すの上手いんだよな！。

粥をだして温めなおしておく。

ぶっっちゃけこういうのって苦手なんだよな、俺料理とか無理無理。小鳥の料理上手いし。まあ、粥ぐらいなら作れるけどよ！。

料理といいやー、あの女、料理得意とかいいながらくそまじいもん食わせやがって。しかも帰ったら怜の野郎が鍋食ってるし。

くそー、俺も鍋食いたかったー！

ジリリリリ、とチャイムの音がする。

何かこう、普段ぴんぱーんっつーヤツだから慣れないねえとか思いつつ、ドアを開ける。

怜がいた。

玄関チャイムを押した後、出てきたのはやはり楠木だった。予想していたとはえ不快と思う。小鳥と同棲してみたい。いや、したい。案内を受け、リビングのソファに座る。此处で小鳥は俺に鍋を振る舞ってくれた。それが楠木のためだったのか、俺のためだったのか分からないが。多分前者だろう。やはり不快に思う。小鳥が俺のために飯を用意してくれるのならそれが例え生肉だろうが虫だろうが喜んで食べよう。

小鳥はどうやら寝てるらしい。覗きたい衝動を押し止める。

おかしい、小鳥が俺の家で倒れた日、思う存分寝顔を見たはずなのだが。やはりあれだけでは足りなかったか。せめてカメラにでも撮っておけば・・・後悔した。

それにしても先程から台所のほうがうるさい。それを楠木に指摘すれば慌てたように台所へ駆け込んで行った。

楠木もいなくなったことだしそろそろ小鳥の様子を見てこよう。

小鳥の部屋だと思われる扉をそつと開ける。微かな寝息を聞こえてきた。それだけで俺の心臓が高鳴る。

扉を閉めるのを忘れずにベッドへ近づく。器用に顔だけを出した状態で、更に猫のように丸まりながら眠る小鳥。・・・ああ、何て愛らしい。瞬きを忘れて見ていたせいかわいた眼球を、閉じることがこれほどまでも辛いとは。

小鳥の一分一秒すべてを自分のモノにしてしまいたかった。

下の階から、ジリリリリという玄関チャイムの音がした。

玄関の音がするボタンを押して出てきたのは、疲れたような顔を
したゆっちゃんのストーカーだった。

あんたみたいな顔が何故そんなに疲れた顔をしてるの？あんたに
会ってしまった七海のほうが疲れた顔をしたい。

そもそも何であんた出てきたの、さすがストーカー。七海でさえ
まだ手に入れていないゆっちゃん家の鍵を持っているのね。寄こせ。

「あー・・・、何でいんの？」

「うるさい。」

「閉める。」

「ゆっちゃんが風邪だからに決まってる。馬鹿め。」

眉間の間に皺を寄せてブツブツと何か言っている。呪いの言葉？
あんたにそんな高度なものを使えるとは思えないけど・・・。やめ
ておいたほうがいい、呪いは跳ね返ってきたりするんだもの。って、
魔女っこ　ハト子ちゃん（アニメ）のハト子ちゃんの弟子の弟子が
言ってた。

家に入れようとしない無礼者をさっさと押しのけて家に入る。ゆ
っちゃんの部屋は2階。

待っててね、ゆっちゃん。

それぞれの思考。(後書き)

みんなの頭ん中はこんな感じだよー、みたいな。

七海ちゃんの一人称は七海、に決定した！

お見舞い。(前書き)

ちなみにこの物語の時間軸は高1の冬です。
わー今更でびっくり！

お見舞い。

「・・・それでみんなお見舞いにきてくれたんだ」

ベッドからけいちゃんと怜、それと・・・家の場所教えた覚えないけど七海を見上げる。

けいちゃんは申し訳なさそうに、怜は熱の籠もった目で、七海は相変わらずの無表情でこちらを見返してくる。・・・皆から見下ろされるのは何というか、気分が悪いというか圧迫感があるというか・・・、まあ、いいや。

「お見舞い。」

ゆっくりと上半身だけを起こす。

すると七海がこちらにぐっと何かを押しつけてきた。ちくちくとした何かが頬に触れる。視界に入っただそれは紛れもない、藁人形である。・・・うん？

そっと受け取って改めてじっくり見ても、やっぱりそれは藁人形だった。ついでに五寸釘と金槌を渡される。

「・・・これは？」

「お見舞い。」

「これが、お見舞い？」

こくりと頷く七海。

これでどうしろと言っのだろうか。頭イタイし怠くて仕方ないとき誰かを呪い殺すのだろうか。

馬鹿だろう。

「あー・・・、あのな小鳥。ゆっちゃんは風邪を引いたら毎回、呪うんだ。」

「・・・他人を？身代わりにでもして？」

「んー、そんな感じ？」

ちなみに自分はそんな馬鹿じゃない。

「それは二次元での話だろう。」

怜が言う。

すかさずけいちゃんが七海が自分をアニメのキャラと重ねていることを話す。いい説明キャラだ、けいちゃん。（親指ぐっ）

七海が何かを期待してるようにこちらを見ている。が、気にしない。

「小鳥、腹空いてるか？」

「・・・分かんない。」

「んー、でもちよつとでも食つといたほうがいいと思うぜ?」

ちよつと持つてくるな、と踵を返そうとして立ち止まった。

そして心配そうに七海をちらちら見る。その気持ちすつごく分かるよ、けいちゃん。

最終的には怜に七海を見張ってるように言いつけ、後ろ髪を盛大に引っ張られてそんな感じで出て行った。

温めなおすにしても数分だろうし、まあ、さすがに数分で何かが起こることはないだろう。

自分はまたベッドに身体を寝かした。

で、だ。

「小鳥、風邪を俺にうつしてくれていい。」

「ゆっちゃん、こんな男より七海にうつして。」

自分の感覚が正しければけいちゃんが出て行ってから、1分も経ってないはずだ。経ってないはずだが何故にこうなった。

ベッドに乗り上げている怜と七海。ちなみに左に七海、右に怜だ。するり、と怜の手が頬を撫で、七海が肩に触れる。悲鳴は口の中に飲み込んだ。

確かことの始まりは怜のあの時はすまない、という言葉だった気

がする。あの時とはもちろん、あれだ。うん・・・それだ。

別にいいよ、と自分は返した。だが怜はそれでは気が済まないように更に謝りそして何故か自分のどこに欲情したか、という話になった。そして小鳥じゃないわゆっちゃんよ、と七海が乱入。

そして今に至る。

・・・けいちゃん、はーやーくーカムバック！

丁度良く、がちやりとドアが開いた。もちろん開けたのはけいちゃんだ。思ったより早い帰りに感謝した心の奥底から。

おかゆが入つてると思われる小鍋を持って入ってきたけいちゃんは部屋に一步入った状態で固まった。

「やー・・・、どうしてそうなった。」

顔を引きつらせたけいちゃんが小さく呟いた。そして溜息をつくと机に小鍋を置いて、こちらに歩いてくる。

七海を掴んで放り投げ、怜には目で降りるように語る。・・・目が据わってるよ、けいちゃん。

「あんなー、俺は確かに七海を見張るように言つたよなあ？」

「先にゆっちゃんに絡んだのはこの根暗男よ。風邪を引いたからって我慢したのに。」

「先にベッドに乗り上げたのはこの女だ。病人だからと遠慮していたのにな。」

ほぼ同時に2人が言った。
疲れた顔しているけいちゃんと目が合う。すぐく申し訳なさそうにされた。・・・別にけいちゃんは悪くないよ。

「・・・病人だつていう意識があるなら、そつとしいてやれ。」

小鍋を持ってきたけいちゃんがやっぱり疲れたように言った。その通りだと思わず頷く。

怜と七海がまたほぼ同時に謝った。・・・さつきから息ぴったりだよ。

けいちゃんは椅子をベッドの近くに持つてくるとそれに座り、レングにすくつて口元に持つてくる。

「・・・え。」

「ん？・・・あー、そうだな。寝てちゃ食いにくいよな。」

そういつて抱きかかえるようにして自分を起こすと、改めて口に持つてくる。・・・え。

「私もやる。」

「・・・お前は何か不安だ。」

「俺は寧ろさりたいが。」

「おい、病人に何させるつもりだよ。てか、やらせねー、ぜって

「やらせねえか「ち、ちよつと！」

い、一斉にこっちを見るな！びっくりするじゃないかつ！
そして黙らないでほしい。

「じ・・・自分で、たびえ、食べられる。」

初めて知ったがどうやら沈黙に弱いらしい自分はまたもどもりながら、自分病人なのに、とかお見舞いちよつと嬉しいとか思いつつ、言った。

お見舞い。(後書き)

更新空いてすみません。

暑いですね、とみせかて最近涼しくて嬉しいでっす。

お見舞い。 2（前書き）

長い間、お待たせ致しました。

まだまだつき合ってくださいる方、もう付き合ってらんねーよ！な方。
ありがとうございます！

お見舞い。 2

風邪を引いて寝込んでしまった自分。お見舞いという名の襲撃。
“はい、あーん” 攻撃。迫りくる魔の手から逃げ切れるのか！

どうなる自分、どうする自分！？

なーてね。今の状況を簡単にまとめてみたんだ。何か三流アニメの次回予告みたいになっただけど…。

え？これは現実逃避じゃないかって？

いやだなあ、はい、あーんされてるんだよ？

いや、まあ確かに高校生ならまだ生暖かい目で見れるかもしれない。だ・が！自分はこういった行為がすっごく恥ずかしい！平然とやってのけるヤツ本当に信じられない！

「というわけで自分で食べられる。」

「いやいや、何がというわけでだよ。」

「恥ずかしいから却下。」

「はいそれ却下。俺はお前をべったべたに甘やかしたいんだよ。」

にやりとけいちゃんが笑う。

・・・そういう無駄に甘いったらしい笑顔を引つ込めてほしいなあ。カノジヨさんにでしとけてんだ（ケツ

「小鳥、楠木のが嫌なら俺がしよう。」

「別に誰が嫌だとかの問題じゃないからね？」

「七海のほうがいいに決まってる。」

「だから・・・！」

「はあ？ 気心の知れた俺の方がいいだろーが、普通。」

「聞けよ。」

話を聞かない人たちが多いのは何でなのかなあ・・・。

まあ、非凡じゃないけいちゃんの周りに集まってくるような人たちが平凡な自分の話なんか聞かないんだろーけどさ。

ちよつと落ち着くために深呼吸してみるが、風邪なのを忘れてました。乾いた空気が喉に入ると咳きが出たりしまったりしませんか？ 自分はします。

というわけで、盛大に咳き込んでしまったわけですが。

あーでもない、こーでもないと言っていた人たちがいきなりこつちをばつと見たわけですが。

・・・こういうときだけぴたりと同じ行動しないで頂きたいのですが。

おいどうしてくれるんだってというような感じで会話している（ような気がする）。

七海がおもむろに藁人形を出すと、ぐっところちに押し付けてきた。無表情で。

「大丈夫？・・・藁人形。」

「悪い、ふざけすぎた。あと藁人形しまおうか。」

「・・・悪かった。」

順に七海、けいちゃん、怜だ。

謝るのなら最初からするなと思った。少し睨んでしまったのは仕方ないだろう。そして藁人形を押しつけないで欲しい。

気まずそうにしてるこいつらだったが、3人に見つめられるなかお粥を食べた自分も気まずかった。すぐく。

それにお粥は、何故か苦みと無駄に甘いという矛盾している味が同居してました。砂糖をぶちまけた上に焦がしたと自分は予想しましたまる、っと。

口の中がベタベタする気がする。

とはいえ折角作ってもらったものを残したくないし、久しぶりに自分以外の手で作られた料理なのだから食べきりたかった。1人で外食なんて寂しいだろ。・・・けいちゃんは自分が作ったの食べたと言って言うし。

でも試食と言ってまずそれを食べた怜はガチツと音がしそうなくらい硬直し、米3粒ほどそろりと口に入れた七海が盛大に顔を歪ませた（美人が台無しだよ！）。そして最後に試食し、顔色を真っ青に変えた作ったけいちゃん自身によって取り上げられてしまった。・・・食べようとしてるんだから別に取り上げなくていいじゃないか。

ちよつと不貞腐れていると、怜がそつとお茶を渡してくれた。

ありがたく貰っておく。

まあ、胸焼けがする気がするけどお腹一杯になったし、薬を飲まなくちな。

「はい、ゆっちゃん。薬。」

「あ、ありがとう。」

「ゆっちゃん、寒いでしょう？ 添い寝。」

ちよつと頬を染めて言う七海。・・・いや、一緒に寝たりとかしないからね？

「いや・・・、風邪移したら申し訳ないから」

「心配、してくれるの？」

「あ・・・ああ、うん、まあ。」

本格的に紅色に染まり始めた七海の頬。・・・何だかこつちも照れるんだけど。

こうやってみるとやっぱりこの子は美少女だ。前下がりの黒い髪なんてキューティクル満載だし、少しつり上がり気味の目は長い睫毛で縁取られている。

無表情なせいで近寄りがたい雰囲気があるのだが、これもこれでクールビューティってヤツだろうか。

まあ、それ以前に頭の中が随分とぶっ飛んでいることが問題なのだけれども。

「・・・なんだかなあ。」

「ん、どうした？」

「いや・・・なんか残念だな、と。」

「あー・・・、今更じゃね？」「・・・。」

そうなんだけど。

あの無表情がなんともなあ、と小さく呟く。

それを聞いたけいちゃんはいっちはどうなの、と怜を指差した。

そう言われれば・・・確かに。

佐藤怜という人。

佐藤怜は確かにいつも無表情だった。

それじゃ、何故言われて改めて常に無表情だと気付くのか。考えればすぐにピンときた。

目は口ほどにものを言う、目は心の鏡、と言ったもので彼の目は随分と感情豊かだ。

例えば、今。

彼の目はなんとというか、ねっとりしている。

熱い視線、と言うのかな、これ。ちょっと顔がひきつる。ねっちょりばっちり絡めとられそうだ。

自分はそつと視線を逸らした。・・・そんな目でみないでくれ。

俺、佐藤怜は最近自分が思いの外感情豊かだということに気が付いた。

斎藤小鳥のお陰で。

幼い頃から泣くことはあまりなかった。

両親は手のかからない子だと褒め、急いで仕事に出掛けていった。

俺は両親の前だけでは無駄に愛想が良い家政婦1人と小学校に入学するまで、大して代わり映えのしない日々を過ごした。

思うに、この時に一般的に過ごしていれば今のよう感情に起伏のない人間にはならなかっただろう。

彼について知ってることは随分と少ない。染めたこともないだろう。女顔負けの綺麗な黒い髪は少し長めだ。面倒くさがり屋の男子がギリギリまで伸ばしたようなもっさりとした髪型に見えるが、彼には何故か似合っていた。前髪はちゃんと整えてあるからかもしれない。切れ長の瞳に見つめられれば逸らしていいのか、つい迷ってしまう（つまり目力がすごい）。

全国的にも有名な進学校に通ってるし、顔もいい（無表情だが）、家は金持ちらしいし。モテる要素は揃ってる。・・・インテリイケメンってやつか。

他にはどういう経緯でかは知らないが、けいちゃんと友人だということ。家に泊まらせると約束をするくらいなのだからそれなりに仲がいいんだろう。ヤツは他人を家にあげたくないタイプだから。

それに、鍵を何処かに置き忘れたりあんな寒い中忠犬の如く待ってたみたいだし・・・、うん、変な人だ。

あまり考えたくないが、彼はどうやら少なからず自分に好意を持っている、と思われる。・・・自意識過剰かな、やっぱり。

とはいえ、このように明らかなモテ男くんが自分を好きになるような理由は思い付かない。

・・・自意識過剰だったんだ。うん。

一目惚れだった。

小鳥と目があつたあの時から、俺は彼女のことを忘れられなかった。

こんな感情は初めてだったのだが、ベタな恋物語のような気持ちの整理ができず混乱に陥ることはなかった。

ただ、初めての感覚に、彼女と話すだけで有頂天になる自分に言いようもない喜びを感じた。

俺は何も欠落などしてないのだ、と思えた。

楠木啓介は俺の唯一の”悪友”だ。それなりに遊び歩き、ときには学校の無断欠席にも付き合った。

この男との出会いのきっかけは少女漫画のように同じ本に同じタイミングで手を伸ばしたことだった。

お互い、特に表情を変えることはなかったし譲ろうとする素振りもなかった。

これでは埒が空かないと行動を起こしたのはしばらく時間が経ち、周りからの視線が気になる程度に多くなってきたときだ。

理由を聞けば知り合いが欲しがっていた、とのこと。今思えばその知り合いというのは小鳥のことだったのかもしれない。この男が只の知り合いのためにわざわざヤツにとっては眠くなる本ばかり置いてある古本屋にまで訪れ買うことなどはしないだろう。

このときは相手に譲るという考えがなさそうだったから譲ることにした。

だが、このようなことが2度、3度と繰り返されあいつはいつも譲るという素振りもなく目つきの悪い無表情でこちらを見るのだった。さすがに今回は譲る気はない、と言えしばらくこちらを睨み舌打ちをしてから黙って去っていった。

奴はどうやら秀才もいるが馬鹿もいる隣の高校に通っているらしく、度々顔を合わせるようになった。意識すればすぐに目がいく男だったということもあるのだろう。

その微妙な距離が縮まったのは奴が俺に面白い本を教える、とふてぶてしく問いかけてきたことだった。

この男のお陰で単調な日々になんか少しばかり変化が起こりそして小鳥と

出会わせてくれた。一応感謝しておく。

楠木の幼馴染みである小鳥は、常に冷静な人だった。肩下あたりまで伸びている絹のように柔らかな黒に近い焦げ茶の髪、少し明るめの茶の瞳。

感情豊かではないが無感情というわけでもなく、ひっそりと咲く野花のように可愛らしく笑う。その笑顔がどうしようもなく好きだった。

笑顔だけでなく、困った顔も苛立った顔も小鳥のならどんな表情でも愛おしく思う。

苛立ちながらも俺やあの七海というふざけた女を受け入れてしまうところも、生暖かい笑みを浮かべてしまう。

気に入らない点があるとすれば、楠木の幼馴染みであるということだろう。楠木の幼馴染みでなければ出会ったこともなかったのだが、俺の知らない小鳥を奴は山ほど知っている。そう考えるだけで醜く嫉妬をしてしまう。

この点は、ベタな恋物語と同じなのかもしれない。

小鳥に関しては理性が効かないことが多々とある。彼女にとってはいいことではないのだろうが、俺にはこのこともまた新たな自分を見つけたと楽しいと感じてしまう。

いつか、彼女の一番になれる日が来るのだろうか。

そのためにはまず啓介と同じラインに立たなければならぬだろう。それはひどく難しいような気がするし追い付けるのかひどく不安にもなる。だが、これさえも俺は楽しいと感じる。

俺は、今までで最も幸せであり楽しい日々を過ごしている。

佐藤怜という人。（後書き）

こんな感じの怜さんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7771r/>

。隣人クライシス。

2011年11月19日22時56分発行